

「人間的直接性」を超えて¹

松 見 俊

昨年、実践神学概論の講義ノートを作成しているときに、ディートリヒ・ボンヘッファーの『説教と牧会』という書物にもう一度目を通しました。ボンヘッファーについては、寺園喜基先生と天野有先生のご専門の分野ですので、この神学校において詳しく学ぶことができると思います。ナチス・ドイツの時代に生きた神学者ですが、ヒトラー暗殺計画に加担したという嫌疑で、39歳の若さで処刑されたキリスト者です。この『牧会』(Seelsorge 通常「魂への配慮」と翻訳されますが)という本は、彼が所長を務めたフィンケンヴァルトの牧師研修所(プレディガー・ゼミナール)で、1935年夏学期から39年/40年の冬学期にかけて半年コースで行われた講義を記録したものです。ボンヘッファー自身の講義ノートは失われておりまして、彼の講義を聞いた研修生たちのノートに基づいて再構成されたものです。私たち、神学校の教師たちの講義を皆さんがノートを取ったものを読んだら、講義をした教師たちが、まず驚くかも知れません。自分が語っていることが、支離滅裂であったり、自分が語ったことが過って伝わっているということがあるに違いありません。再構成された、このボンヘッファーの『牧会』(Seelsorge)もかなり断片的であります。しかし、それが断片的であるゆえに、かえって生々しく、そして学生たちが、その講義をどのように聞いたのか、ボンヘッファーの講義のどのような言葉が学生たちの心に響いたのかが伝わってきます。彼が逮捕されたのが、43年4月、処刑されたのが、45年4月ですから、ヒトラーの圧力の下に生き、幾年か後に逮捕され、死ぬことになる人間が、しか

1 これは、2005年4月7日西南学院大学神学部開講講演で行った講演に多少手を加えたものであるが、講演の雰囲気を残すため「ですます調」のままにしてある。

も、30歳代前半の若手の研修所所長が、教会に仕えていこうとする青年たちに何を言い残したかったのか、極めて緊張感が漂っていて、とても興味あるものです。もちろん、牧会経験も少なく、30歳そこそこという人生経験の短さゆえに、いかに天才的神学者といえども様々な限界もまたあるに違いありません。

さて、彼の講義について二つの点で私は心を引かれました。第一は、「実際に牧会された経験を持つ者だけが牧会することができる」という主張です。「奉仕においてお互いに助け合うことはあたりまえのことである。しかしわれわれはまた、他の牧会者によって牧会してもらうことを必要としている。どんな牧会者でも、牧会者としてのひとりの兄弟を必要としている。(今日では包括的言語として「姉妹」にも言及すべきでしょう!)自分でも牧会を受けた経験を持った人だけが、牧会を実際に行うことができるのである。…われわれには、日ごとにわれわれのためにとりなしの祈りをしてくれる人を必要としている。牧会なしに生活する者は、容易に魔術師(マギール)に、他人の魂を支配する者になる²というくだりです。私自身、カウンセリングにはカウンセラーのカウンセラーが必要であるということは知ってはおりましたが、自分自身、「牧会された」という経験が、あるいはその自覚があったらうかと、牧師は一方的に牧会の担い手であるという自意識はあっても、自分も牧会されねばならない、そのような弱さ、危うさの自覚、教会に生きる者としての喜びがあったらうかと問われたのでした。

第二のことも、この第一のことと本質的に固く結びついていることでありますが、人間的な「直接性」を批判するボンヘッファーの言葉です。そしてこのことがらが本日の開講講演の基本テーマであります。ボンヘッファーは、『牧会』の講義の中の、牧会の前提について述べる中で、ちょっとしつこい程に、人間的な「直接性」を批判しています。こんな風に言います。「神への絶えざる祈りを抜きにしては、牧会的な対話は存在しない。わたしが他者の前に立つことによって、わたしは神ご自身の前に立つのであることを、そ

2 D. Bonhoeffer, Seelsorge, Halbsjahr-Seminar-Vorlesung zwischen 1935 and 1939. 森野善右衛門訳『説教と牧会』(新教出版社)1975年, 189頁。

の人は知らねばならない。わたしは聖霊の助けに依り頼む。他者に至る直接的な道は存在しない。兄弟に至る道は、祈りと神のみ言葉に聞くことを通って行く道である。³ここで、「直接的な」という言葉が、unmittelbar という用語で説明されているように、「直接的」ということは「無媒介的」に「媒介なしに」ということです。実は、人と人との間には、神ご自身が介在され、それは聖霊と置き換えてもよいのですが、だからこそ、「祈りとみ言葉」を媒介にして、人と人が出会うことができるのだ、とも言うことができるわけです⁴。直接的で、親密な、仲の良い人間関係はそれなりに意味があるのですが、いかに、直接的で、親密で、仲の良い関係でも、そこに、神が、聖霊という形で介在されており、人は祈りとみ言葉なしでは他者に近づくことはできないというのです。ボンヘッファーの場合は、より正確に言えば、聖霊の介在というより、人と人との間の「キリストの現実」(die Wirklichkeit Christi)としてキリスト論的に規定していると言えましょう⁵。さらにボンヘッファーは、次のように言葉を重ねます。この部分は最初の講義にはなく、36年に挿入されたようです。「心理学は、他者の魂に至る道を見出すのにわたしの助けとはならない。その理由はキリストの仲保者性にある。わたしと神との間、またわたしとわたしの兄弟との間には、仲保者であるキリストが立ちたもう。したがって牧会のわざにおいては、決して直接的な心理的な影響を及ぼすことを求めることはできない。直接的に与える影響は、まったく表

3 前掲書 123 頁。原文は以下の通り。Menschen kommen nie direkt,unmittelbar zusammen, sondern nur durch Gebet und Hoeren auf Gottes Wort.

4 Cf. J. Taylor, The Go-Between God. The Holy Spirit and the Christian God. 1972. キルケゴールも神は人と人の間に介在する中間規定であると言う。さらに、人がイエスに近づくことも、イエスが歴史学的には「微行」(インコグニト)において来られたゆえに直接性をもって近づくことはできないこと、もし直接性をもって近づけば躓かざるを得ないこと、ただ信仰だけが人がイエスと結びつけられる道であることを強調した。(『イエスの招き』井上良雄訳、角川文庫、167 頁以下。) 個人主義的な実存主義者と言われるキルケゴールも「直接性」を批判していることになる。こうして「直接性」批判は、神と人、人と人、そして神人イエスと人との関係について貫徹されねばならない。キルケゴールの「逆説」の神学は神と人、イエス・キリストと人との間の深い「断絶」を保持する逆説であった。

5 鈴木正三『キリストの現実に生きて ナチズムと戦い抜いたボンヘッファー神学の全体像』(新教出版社) 2006 年。

面的なものにとどまっている。』⁶ここで批判されている「心理学」とは、フロイト流の当時の心理学であり、今日では、心理学はもっと発展しているということもできるし、神学校で心理学を学ぶことも重要なことでありましょう。しかし、キリストの介在を考慮に入れるときに、心理学には必ずと限界があり、心理学の神学的批判が大切になるのです。むろん、この逆も真なりです。神学は心理学的な人間の現実分析の力に耳を傾けねばならず、具体的は状況を無視して、ただ神の言葉を振りかざす、いわゆる「お説教」をすることの問題性を自覚すべきでしょう。ボンヘッファーが「他者に対する助けが与えられるためには、彼はキリストご自身との交わりを持っていなければならない。わたしの信仰 (Froemmigkeit) もそのためには役に立たない』⁷と警告するように、わたしたちの「敬虔さ」が、み言葉を押し付けて、心に病を負う人をますます追い詰めてしまうことがあるのです。神学は万能ではなく、心理学からの批判を受けねばなりません。ですからボンヘッファーは、牧会は聴くことであり、「ほかの人間の言葉に耳を傾けることのできない人は、もはや神のみ言葉に聞くこともできない。そしてはや祈らなくなる!』⁸と警告しているのです。

しかし、それにもかかわらず、人間的無媒介性は問題であるのです。しかも、それは常にとても美しい形で立ち現われてくるのです。ボンヘッファーは言います。「直接的な道は、思慮と助言とを含んでいる。それは他者を自分自身のもとへ引き寄せる。』⁹そして、こんな風に言います。「彼 (精神分析家) は、直接性を、二人の魂の [直接的な] 出会いを求める。精神分析においては、最初の段階が過ぎると、担当の医師への依存を意味する「医師コンプレックス」が現われる。たとい分析過程の第二の段階でこのコンプレックスの解消のための努力がなされるとしても、そこでは真の解決とはならず、ただ依存の形を変えるだけである。』¹⁰ まあ、精神分析家にもいろいろあるで

6 ボンヘッファー、前掲書、123頁。

7 ボンヘッファー、前掲書、123頁。

8 ボンヘッファー、前掲書、124頁。

9 ボンヘッファー、前掲書、125頁。Wer den direkten Weg sucht, sucht nur den Weg menschlicher Ueberlegungen, Ratschlaege.

しょうから、精神分析家を、牧会において直接性を求める牧師と置き換えてみましょうか。「人間的な親しさを求める牧師は、直接性を、二人の魂の[直接的な]出会いを求める。そのような牧会においては、最初の段階が過ぎると、担当の牧師への依存を意味する「牧師コンプレックス」が現われる。たとい牧会過程の第二の段階で、牧師を見てはならないなどと言って、このコンプレックスの解消のための努力がなされるとしても、そこでは真の解決とはならず、ただ依存の形を変えるだけである」。ですからボンヘッファーは言います。「他者が牧会者との[直接的な]結びつきを求めるところでは、牧会者は冷酷なようでもきっぱりとそのような要求を拒否しなければならない。しかし、そうすることがむしろその人を愛することになるのである。心理的な直接性というむしむしする雰囲気は、牧会においては現われてきてはならないものである。牧会者は他者を深く愛するゆえに、その人にうらまれる破目におちいることもあるのである。」¹¹

さらに何箇所か興味深い文脈で「直接性」という言葉が登場するのですが、今日は、牧会学のクラスではなく、神学部の開講講演でありますので、話題を聖書に移しましょう¹²。読んでいただいた聖書の箇所はヨハネ21:15~19です。この有名な箇所からは、いろいろな角度から話ができることでありましょう。多少ステレオタイプでもありますが、用いられている「愛」という用語が「アガパオー」から「フィレオー」に変化していることに注目することもできるでしょうし、自分の働きや愛を他者と比較するのではなく、自分自身に与えられた使命を果たすべきであるという説教も可能でしょう。まさに、教会は、「わたしの羊を飼いなさい」という牧会の委託をされた根拠を

10 前掲書、145-5頁。

11 前掲書、125頁。

12 たとえば、『キリストに従う』(Nachfolge)において、「キリストがこの世に来られて以来、人間の神に対する関係もこの世に対する関係も、いずれも直接的な関係はない」と言い、「われわれにとっては、キリストを越え、その言葉を越えて行く道、そしてわれわれの服従以外に、他者に至る道はない。直接性は欺瞞である」と主張している。(森 平太訳、新教出版社、1966年、87頁、88-89頁)これはバルトの自然主義神学批判に繋がるテーマであるが、ボンヘッファーの神学を「直接性」批判の神学として理解することも興味深い。

ここで見出すこともできるでしょう。まあ、「アガパオー」と「フィレオー」の区別だけでなく、なぜ、「羊」と「小羊」, 「飼う」と「世話をする」という用語上の区別があるのかという点での説教はあまり聞いたことがありませんが。

しかし、今日は、「はい、主よ、わたしがあなたを愛していることは、あなたがご存じです」というペテロの巧妙な答え方だけに注目してみましょう。これは皆さん、ご存知のように、よみがえらされた主イエスが、「ヨハネの子シモン、わたしを愛しているか」と聞かれたことへの応答であります。最初の問いは、「ヨハネの子シモン、この人たち以上にわたしを愛しているか」と尋ねておられます。この問いかけは、「たとえ、みんながつまずいても、わたしはつまずきません」(マルコ14:29)がその背後にあるのかもしれない。

さて、基本的な問いは、イエスの十字架の刑死と復活の経験はペトロをどのように変えたのであろうかという問いです。これも皆さんよくご存知のように、ヨハネ13:36~38にはペトロの離反、裏切りの予告の場面が描かれています。「シモン・ペトロがイエスに言った。『主よ、どこへ行かれるのですか。』イエスが答えられた。『わたしの行く所に、あなたは今ついて来ることはできないが、後でついて来ることになる。』ペトロは言った。『主よ、なぜ今ついて行けないのですか。あなたのためなら命を捨てます。』イエスは答えられた。『わたしのために命を捨てるというのか。はっきりしておく。鶏が鳴くまでに、あなたは三度わたしのことを知らないと言うだろう。』」。ここでは主イエスとペトロの関係はペトロの側からは「直接性の関係」です。「あなたのためなら命を捨てます」という告白はいわば直接的な「I love you」の世界です。人間の実存をかけた告白と服従は大切なことであります。しかし、十字架の躓きと復活経験を経たペトロは、この「I love you」をもっと大きな文章の中に、位置づけているのです。「わたしがあなたを愛していることは、あなたがご存じです」。You know that I love you。「わたしはあなたを愛します」という自分自身を主語にした信仰告白を、主イエスを主語にして、わたしがあなたを愛していることは、「あなたがご存じです」という文

章に包んでいるのです。私が牧師・伝道者として献身する際に非常に重要となった聖句はルカ22：31-32です。そこでは、「シモン、シモン、サタンはあなたがたを、小麦のようにふるいにかけてを神に願って聞き入れられた。しかし、わたしはあなたのために、信仰が無くならないように祈った。だから、あなたは立ち直ったら、兄弟たちを力づけてやりなさい」と言われています。いわゆる史的イエスがこのようなことを語られたかどうか判断することを、皆さんはこれから神学校で学ばれるし、すでに学んでいる方も多いでしょう。あるいは、先ほどのヨハネ21：15以下も極めてヨハネ福音書的であります。しかし、私たちが主イエスに信頼し、主イエスに祈る以上に、イエスさまご自身が私たちに信頼して下さり、私たちのために祈って下さっているという信仰の事態 Sache は真実なものでありましょう。私たちは自身自身の信仰が揺さぶられ、ほとんど無くなってしまふことがあるし、祈ることもできないことも多いのです。その時に、主イエスの祈りが私たちと神とを、主イエスとを繋いで下さるのです。主イエスと私たちの無媒介性の幻想がここでは退き、主イエスの祈りが介在しているのです。そして、そのことが分からなければ、私たちは人を慰め、力づけることなど到底できないのです。神はわれわれの裏切り行為でさえ、救いのみ業、私たちが他者と共に生きるために用いて下さるのです。私にとっては、主イエスを裏切るかも知れないということが牧師・伝道者として立つことの恐れであり、躊躇でありましたが、裏切るなら、裏切ったらよいのです。「わたしは羊飼いを打つ。そして、羊は散らされるであろう」(マルコ14：27)。しかし、その躓きが、兄弟姉妹を力づけ、慰める共感・共苦の根拠ともなるのです。

ペトロの信仰はいつ、どこから始まったのでしょうか。イエスに出会い、すぐ網を捨て、イエスに従ったときでしょうか。(マルコ1：18) フィリポ・カイサリアで「あなたは、メシアです」と告白したときでしょうか。(マルコ8：29)あるいはイエスが、愛するしゅうとめの熱を癒して下さった奇跡を経験したときでしょうか。あるいは、ルカ5章に描かれているような奇跡的大漁の経験が網を捨てる機会となったのでしょうか。(ルカ5：1-11)彼の信仰がどこから始まったのか、それはわたしたちの信仰がどこ

から始まったのか大抵ははっきりしないように、良く分かりません。そして、福音書には、過去→現在→未来という時間の流れと、復活から、十字架へ、そして十字架の刑死から十字架に至る道行きへと遡及する流れとが相互交差的に (reciprocal) 描かれているように、私たちの信仰経験もきっと同様なものでしょう。しかしながら、ペトロが自分の信仰を神学的に反省したのは、イエスの十字架と復活の経験を境にしてであり、その内実は直接性の危うさの自覚であり、十字架と復活の信仰経験は、「わたしはあなたを愛しています」という告白をもはや手放しではせず、「はい、主よ、わたしがあなたを愛していることは、あなたがご存じです」という複文として表現している中に言い表されていると言ってよいのではないのでしょうか。

さて、今日は、開講講演であって、礼拝説教をしているわけではないので、ボンヘッファーが強調し、聖書が示している人間的な「直接性を超えていく」ことについて、神学校での学びの課題として展開してみましよう。ドイツの神学者エバーハルト・ユンゲルが、Person und Gottesebenbildlichkeit「人格と神の似像性」という論文において人間は人格として神に造られており、人格として自分自身との関係において、自分と隣人あるいは世界との関係において、そして自分と神との関係に生きるものとして創造されていると言います¹³。

第一に、ちょっと可笑しい言い方に聞こえるかも知れませんが、自分自身との関係において、私たちは無媒介的に、直接的に生きてはならないという課題があります。ユンゲルは人間に与えられている「良心」について語ります。まあ、「良心」という翻訳が正しいかどうかという問題もあります。悪い良心などという表現 (bad conscience) があり、「赤信号みんなで渡れば怖くない」と言われるように、社会的共通知識としての「良心」がいつも倫理的に良いわけではないからです。ここでも聖霊に照らされた心のあり方が重要なのですが、まあ、その問題はさておき、ユンゲルは、良心というものは「私は何をするか」(what I do) の問題を裁くのであり、「私は誰であるか」

13 E. Juengel, "Person und Gottesebenbildlichkeit," in: Christlicher Glauben in moderner Gesellschaft. 24, Basel, 1981, 58-99.

(who I am) を裁くのではない。これが混同されると、人は自分自身を受け入れ、愛することができない、言わば、自己受容ができなくなると語ります。自分自身の内面性をいたずらに覗き込んだり、人の顔色ばかりを気にせずに、神から造られている人格、神から赦され、愛されている自分自身を受け留めねばならないのです。こうして自分ともう一人の自分との間に、人間の自意識の構造の中に神が介在されるのです。あるいは、ポール・ティリッヒはこんなことを言います。『組織神学』の第三巻の最初の章で「生とみ霊」について論じていますが、彼は「生の自己実現とその曖昧さ」について語ります。「しかし、(人間の) 生は曖昧である。なぜならそれは本質的な要素と実存的な要素を結合するからである。…霊の次元における行動の基準への直線的な確実な道は存在しない。潜在的なものの領域は部分的に顕らわであるが、部分的には隠されている。それゆえ、霊の領域においては具体的状況に、ある基準を応用することはひとつの冒険であり、リスクである。それは勇気と失敗の可能性を受け入れることを要求する。」¹⁴ 「曖昧である」ということはもちろん、終末時の完成途上にある者としての不完全性を意味しているのですが、生というものは実はそれだけ複雑で、奥深く、簡単には割り切れないということかも知れません。神学の勉強は、逆説的な言い方ですが、神が介在し、恵みによって救われているがゆえに、この曖昧さに耐えていく訓練をする、どこかすでに贖われているがゆえに、多様な信仰理解をする姉妹兄弟たちを受け入れていく訓練をする機会であると言ってよいでしょう。

第二の課題は、人と神との関係です。私たちは無媒介的に、直接に「神」を経験することはできません。神さまとの直接取引はできないのです。私たちは、イエス・キリストの啓示の出来事を通して、神を知り、また、み霊の働きを通して、そのキリストを知るのです。神はみ子キリストにおいて近き神であると同時に、み子イエスにおいてという限りにおいて、いつまでも人間の所有物にはならない遠き神なのです。まさにルターの言うように、神はご自身を隠しつつ現し、ご自身を現しつつ隠す神なのです。(イザヤ45:15) そして、「キリストの出来事」と言っても、私の理解と他者の理解とは微妙

14 P. Tillich, *Systematic Theology*. III, 1978, 29-30.

に、あるときは大いに違っていますから、神学校において厳密なキリスト論的、信仰的反省が要求されます。また、聖霊の経験は、それが人間の魂の深いところでの、神と人との交わりの経験であるゆえに、先ほどのティリッヒの言葉のように、なおさら曖昧です。ここに、いわゆる「カリスマ的」信仰理解の危うさの問題があります。ペンテコステ派の実践神学者ルドルフ・ボーレンは『説教学』¹⁵の第20章において「説教と異言」について論じ、異言の存在を弁護しておりますが、彼は聖霊の経験が常に曖昧であるとも言っています。このように言えるボーレンはやはり聖霊の出来事を良く理解できているのだらうと思っています。

さて、第三に、人と人との交わりにおける直接性の問題があります。先輩、後輩を含めた学生たちの交わりのことがあり、学生と教師たちとの交わりのことがあり、さらに、一般的に、私たちが本や講義を通してなす神学者たちとの交わりのことです。学生たちが仲の良い交わりを作り出すことは大切です。それを否定する必要はありません。しかし、仲が良いということが閉鎖的、排他的「内輪仲間」を意味するのであれば、それは仲間の中での自己確認しか起こらない、まさに悪しき直接性の交わりでありましょう。あるいは、交わりを避けて、孤独になり、ただ神学者たちと本を通じてのみ付き合うのも、どこか、逆に、直接性の克服としての冷たさに見えながらも、それはどこか人間の交わりの直接性に捕らわれているようなものではないでしょうか。異質な者同士がそのまま出会い、そして互いに変えられていく、そのための勇気が必要であり、冒険、失敗やリスクを恐れてはならないのではないのでしょうか。牧師になり、教会に仕えるということは、まさにそのような異質な者との出会いの冒険、失敗、リスクに自分自身を開くことなのですから。

学生と教師との関係についても同じことが言えるでしょう。教師と仲が良くなり、出会いと深い交わりが成立することは嬉しいことです。ある教師がある学生に、ある学生がある教師に人間的な愛着を持つことも悪いことではありません。しかし、その人が好きか、嫌いかの偏見から、神学的 Sache を

15 R. Bohren, Predigtlehre, 1971. 加藤常昭訳（日本基督教団出版局）、1977年、591頁以下。

聴き損なうなら、それはやはり、悪しき直接性であり、人間的な未成熟であると言ってよいのではないのでしょうか。私たちはどこかで、100%か0%で人間を判断し、白か黒かと決め付けてしまいがちなのです。それは一つの自己防衛の心理であるかも知れませんが、神学校においては決して相応しい態度ではないのでしょうか。

さらに一般化して言えば、私たちはいかなる教師からも何か積極的なことを学び、いかなる教師をも「言葉本来の意味で」相対化し、批判的な関わりを持つべきでしょう。教師はまたいかなる学生にも何か積極的な面を見出し、そういうことは少ないでしょうが、猫可愛がりには避けるべきです。私はスイスに留学中のときに、「タカシは、神学者中心に（theologian-oriented）にものを考えている。そうではなく、神学的事柄中心に（Sache-oriented）神学せねばならない」と言われたものです。バルトが言っていることはすべて正しい、モルトマンが言っていることはすべて正しい、誰々が言うことは、もうその名前を聞いただけで拒否反応が出てしまう。これもまた悪しき直接性に捕らわれているのでしょうか。バルトが、モルトマンが、そしてブルトマンやケーゼマンが、何と格闘しているのか、彼らが格闘している恵みの事柄、信仰の事柄、教会の課題が決定的に重要なのです。

私は西南学院大学神学部が、学生も教師もそのような信仰の冒険の勇気のある、リスクと失敗の可能性を恐れない、隣り人からいつもチャレンジを受けることを喜ぶ神学校であるように期待しています。ボンヘッファーがあのナチズムと教会の危機の時代に、それは実は、文化的、政治的、信仰的「直接性」の危機の時代でありましたが、「他者に至る直接的な道は存在しない。兄弟（姉妹）に至る道は、祈りと神のみ言葉に聞くことを通って行く道である」と語ったことを、2005年度の新しい学期が始まるにあたり、皆さんと反芻し、黙想したいと願っています。

誠に貧しい内容の話にもかかわらず、ご静聴ありがとうございました。